

緒 論

1. 英語の language なる語は拉丁語の lingua (舌) より佛蘭西語を経て轉化して來たもので譯して言語と云ふ。蓋し言語は聲音によりて思想を發表するもので、舌は實に其發聲に最も重大なる關係を有すとせられたからである。

2. 吾人が思ふ所や欲する所を發表せんとするには必ずしも言語の媒介を要せない場合がある。例へば狼の來るを見て恐怖を感じ人に警告せんとする時、其人の手を採り其方向を指し示せば以てよく其用を便すべく、又己の顔色と態度とはよく自己の恐怖を表はし得るが如きものである。

3. けれ共斯の如きは決して完全なる思想の發表ではなく、又時に誤解を來さずとも限らない。而して其誤解なきを保するものは實に言語である。即ち上記の場合に於て狼の來る方向を指し Wolf! Wolf! と叫ばゞ其正確の度に於て大に優る。而して此 wolf の如く聲音の集まりて一箇の意味を表はすものを語 (word) と云ふ。尤も時には只一箇の聲音丈で一語をなすものもあるけれ共それは比較的少數である。

4. かく聲音又はその集合によりて生じたる語は人々

相互の諒解によりて夫々確定的意義を傳ふる記號となる。即ち man, woman, cat, dog, courage 等と云はゞ吾人は皆夫々一樣の事物性質等を思爲すべく、go, walk, bark, conquer 等云はゞ夫々一樣の動作を腦裡に描くべく、tall, beautiful, small, big; bravely, gracefully, pleasantly, fast 等と云はゞ吾人は皆夫々一樣に性質模様等に関して各一種の明瞭なる觀念を得る。

5. 以上の man, woman, cat, dog, courage 等の如く一定種類の事物を指定するため各別々の事物に與へられたる名を名詞 (Noun) と稱し、go, walk, bark, conquer 等の如く一定種類の動作を描く語を動詞 (Verb) と呼び、tall, beautiful, small, big 等の如く名詞に附隨して其性質形狀等の屬性を示す語を形容詞 (Adjective) と名付け、bravely, gracefully, pleasantly, fast 等の如く動詞に附屬して其動作等の模様を明かにする語を副詞 (Adverb) と云ふ。而して此等の語は斯くの如く夫々事物、動作、状態、性質、形狀、模様等に関して一定の觀念を表はすを以て之を表示語 (Presentive Words) と云ふ。

6. 此等の語は時に孤立して思想を表はす事を得るは勿論であるが多くは不完全なるを免がれない。凡そ吾人が思ふ所欲する所を完全に表はすには大抵の場合に於ては此等の語の集團に依らねばならぬ。而して其集團にし

て或るもの (person or thing) を主題とし、そのものに就き何等かの事を述べ、以て纏まりたる一箇の完全なる意義を表はすものを文 (Sentence) と云ふ。例へば

Dogs bark. Cats play. Man speaks.

7. 即ち文は其主題なる部分と、其主題たるものにつきて何事かを述ぶる部分との二部を有せなければならない(特に省略する場合は別として)。前者を主語 (Subject) と稱し、後者を述語 (Predicate) と云ふ。上例イタリック體の分は夫々その文の主語にして餘はその述語である。又

Big dogs bark fiercely.

Lovely cats play merrily.

の如き文に於ては big, lovely は夫々文の主語たる dogs, cats の附屬物、fiercely, merrily は夫々文の述語たる bark, play の附屬物で各説明修飾の役をなすを以て此等を概稱して修飾語 (Modifiers) と云ふ。

8. 上例の如き文は最も單純なるものであるが吾人の思想は必ずしもしかく單純なる文を以て表はし得るものではなく尙幾多の語を用ひざれば能はざる場合が多い。而して多くの表示語を連ね用ふる内には其間相互の關係を明白にする語を必要とする場合を生ずる。例へば

Here is a letter for father.

Here is a letter *from* father.

の二文に於て若し *for*, *from* がなければ *letter* と *father* との間の相互關係が不明であり、随つて此等二行のものは只語の集團たるに止まり何等纏まりたる意義を表はさざるを以て文でなくなる。即ち此等二行のものをして文たらしむるには文法上所謂前置詞 (Preposition) たる *for*, *from* を必要とする。而して此等の語には夫々特有の意義あるは勿論なれ共其意義たるや表示語の場合に於けるが如く各自獨立したる意義にはあらずして表示語の間に立ちて其の關係を明かにするものなるを以て斯の如き語を表示語に對して關係語 (Relative Words) と稱へ又一に連結 (Connectives) と云ふ。

9. 文法上に謂ふ接續詞 (Conjunction) も亦關係語の一である、即ち

Father *and* mother live in England.

Father returned, *but* mother did not.

と云はゞ *and* は *father* と *mother* との間に立ちて其兩者を結び此文に於ける主語としての共同關係を成立せしめ、*but* は *father returned* と *mother did not* との間に立ちて其兩者を結び相互の對照を明かにする。而して此の第二例に於て見る如く、接續詞は語の集團と語の集團との關係を明かにする事が出来るのである。

10. 代名詞 (Pronoun) の中 I, you, he, she, it の類や this, that, these, those の如きものはものを指定する時名詞を用ふるに及ばざるか、又は名詞の重複するを避くる時用ふる語で表示語たる名詞の代用たるに過ぎないが、関係代名詞 (Relative Pronoun) は関係語の役目をも兼ねて居る。例へば

This is the house *which* I live in.

に於て *which* は house を受けて其代用をなすのみならず又 this is the house と I live in との関係をつけてよく此二部分を集めて一文たらしむるものである。

11. 形容詞副詞は既に説きし如く大抵は表示語であるが、其内に関係形容詞 (Relative Adjective) 関係副詞 (Relative Adverb) なるものがあつてそれ等は其名の示すが如く関係語である。

He makes the most of *what* money he has.

I remember the house *where* I was born.

の *what*, *where* の如きが即ちそれである。

12. 又動詞の中にも to be の如きは場合によりては意義上文中主要なる陳述をなすにあらざして、主要なる陳述をなす語を他の語に連結して其兩者の関係を明かにするに止まる事がある。例へば

He is a Japanese.

の *is* の如きはそれである。尤も文法の形式からは *is* を此の文の述語と云ふが事實上陳述の主要點は *a Japanese* の方に表はされて居る*ので *is* は *He* と *a Japanese* との間の連結に過ぎない。故に斯の如き動詞をば特に連結動詞 (*Copula*) と名付ける事がある。尤も同じ *to be* でも存在、生息等を意味する場合は純然たる表示語である。例へば聖書中の

Before Abraham *was*, I *am*.—*John*, viii. 58.

の *was*, *am* の如きは表示語である。又次の諸例に於ては此動詞が兩様に用ひられて居る。

Whatever *is is* in its causes just.—*Dryden*.

Whatever *is*, *is* right.—*Pope*.

What *is*, *is* what has been.—*Dana*.

13. 以上概観したる名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、前置詞、接續詞の外に、吾人が心に感ずる感情を其場に吐露する特殊の語例へば *Hurrah!* *Alas!* の如き語がある。此等は文中何等一定の關係ありて用ひらるゝにあらざして隨處に投用せらるゝを以て間投詞 (*Interjection*) と名付けられる。

14. 凡そ英語の有する語其數幾千萬なりと雖異を分ち類を集むれば如上の八種となる。これ所謂八品詞 (*the*

* § 67 脚註参照。

Eight Parts of Speech) である。然し此の區別は相關のものので決して某々の語は某々の詞類に屬するといふ様な嚴然たる區別のあるものではない。此種の事を詳説するのは本書の目的でない故茲には只一ツ *but* と云ふ語をかりて其例を示すに止める。此の語は

He went, *but* I stayed.

に於ては接續詞

Who could have done this *but* him?

に於ては前置詞

There is *but* one God.

に於ては副詞である。又同じく接續詞と云つても上例第一に於ては對等接續詞 (Co-ordinate Conjunction) であるが、次の場合に於ては *but* は從屬接續詞 (Subordinate Conjunction) である。

It never rains *but* it pours.

又次の如き場合には擬關係代名詞* (Pseudo-Relative Pronoun) となつて居る。

On the house-tops was no woman

But spat towards him and hissed.—*Macaulay*.

又更らに甚だしき轉用は

* この擬及び Pseudo なる語は、生物學上の術語を余が新たに利用したのである。

But me no buts.—Fielding.

で前者は臨時動詞 (Nonce-Verb)、後者は臨時名詞 (Nonce-Noun) である。

15. 而して此八種の品詞中名詞、代名詞、形容詞、動詞及び副詞は文を構成するに當り、場合により意味に依りて多少形態上の變化をなす。其の各種の變化を總稱して屈折 (Inflection) と呼び、此等の詞類を屈折品詞 (Inflectional Parts of Speech) と名付け、他の形態上の變化なき詞類を不屈折品詞 (Non-inflectional Parts of Speech) と稱する。

16. 而して此の屈折なるものは各自其語の意義を定むる上に必要なるのみならず、又其の語と他の語との關係を示すに極めて重要なるものである。例へば men, boys は夫々 man, boy が二人以上あるを示すに過ぎぬけれ共 man's life, boy's hat と云はゞ man が life に對し、boy が hat に對して其の所有主たる關係を表はすが如きものである。

17. 文に於て語と語との關係を示すものには前述の通り關係語あり、今又此の屈折あるを知ると雖、文中に在りて語と語との關係を示すものは常に之れのみではない。語の配置如何は時に嚴として其の關係を決定するものである。例へば

Brother loves sister.

と言へば brother が愛する人にして sister は其愛を受くるものたるは慣例上一定したる規則である。拉丁語の如き屈折の複雑なる語に於ては此間の關係が比較的自由に

Frater sororem amat. (=brother sister loves)

Sororem frater amat. (=sister brother loves)

の兩者は語氣に於てこそ大差あれ、其の意味する事實に於ては何れも同一で明瞭である。即ち sororem の語尾 *em* は目的格 (Accusative Case = Direct Object Case) の特徴であつて、其語の位置如何に拘はらず動詞の目的たる事を明示して居るのである。然るに英語に於ては斯の如き屈折なきを以て此事實を表はすには是非共如上の配置法によらねばならぬ (此事に關する詳細は第八章 II 參照)。古英語 (所謂 Anglo-Saxon を以て其代表者とす) に於ては名詞の屈折が今日の英語に於けるよりも遙かに複雑にして語と語との關係が其屈折に依りて示されし事今日の比にはあらねど而も此の例の場合に於ては主格 (Nominative Case) と目的格との區別を示す屈折を有せず今日の英語に於けると同様、其配置によりて其關係を表はし

Brōðor lufað sweostor.

としたものである。それで若しこの sweostor と brōðor との位置を換ふれば今日の文に於て sister と brother との位置を取換へたのと同様の意味の變化がある。兎に角語と語との關係を示す屈折なく、前置詞等の關係語を用ひざる場合に於ては、語の配置如何がその關係を定むるもので英語に於ては此事が極めて有力重要なものである。

18. 以上説く所に依りて知らるゝ通り語を集めて一箇の完全なる文とするには表示語の外に關係語をも要する事多く、又用語共物に形態上の變化を加へる必要もあり、語の配置上に於ても自から法則の存するありて漫然たる配列集團を許さない。この語の屈折を研め其の意義關係を明かにし、進んで其の集まりて文を構成する法則を求め、言語に依る思想の表明法に關する一切の現象を論ずる學を文法 (Grammar) と云ふのである。而して各品詞につき其屈折意義等を論ずるを語格論 (Accidence) と云ひ、此等を纏めて文を構成する法を考査するを文章論 (Syntax) と名付ける。而して本書が特に汎論と名乗る所以のものは、從來の文章論中、文の構造に關する分解的にして且同時に統合的なる研究を試みたものであるからである。

19. 而して言語はその發達の初期に於ては聲音に依

りて思想を發表するに過ぎずと雖も、文化のやゝ進むに従つて之れを文字に書き表はして時又は場所を隔つる人に己が思想を傳ふる方法を生ずる。凡そ聲音に依りて其の場に在る人に己が思想を通ずる際には其の場合の状況、己の口調、態度、身振、顔色等に依りて大に助勢せらるゝ所あり實際の用語は比較的簡單に、語法は比較的自由なるを得べきも、文字によりて思想を後世に傳へ若しくは遠隔の地に送る如き場合には此等の便宜なく従つて其用語は比較的多數となるを通例とし、其語法は比較的嚴格なるを要し、又句讀法 (Punctuation) の如き特殊の要件を加ふるのである。是故に吾人が文法を講ぜんとする際には事實其着眼點を二にせなければならぬ、幸にして英語に於ては口語と文語との差異、邦語に於けるが如く甚だしからずと雖も、尙且兩者の間に多大の差異あるは固より其所である。今吾人が英語の文法を研究せんとするに當りては主眼を文語に置き口語を従とするものである。

20. 尙ほ言語は一種の生活體で其の要素は絶えず新陳代謝し、其の組織は常に變化しつゝありと言ふ事が出来る。而して其民族の歴史に異常なる事件を生ずる時は其の結果として言語にも亦異常なる變動を見るのが常である。英語の如きは實に此種の變動を關する事の最も甚

だしかりしものゝ一で所謂古英語 (Old English, 凡そ七世紀より十二世紀末葉まで、Anglo-Saxon 即ち Wessex 語を以て其代表者とする)、中古英語 (Middle English, 十二世紀末葉より十六世紀の中頃まで、Chaucer の英語を以て其代表者とする)、及び近代英語 (Modern English, 1550 年頃より現代に至る) の間には非常なる變遷をなし來つたのである。今日吾人が研究せんとする英語は固より近代英語、殊にその内最近世の英語であるが、過去なくして現代はあらず、現代の英語を研究考査せんとするに當りては屢過去の英語を説かなければならぬのは當然の事である。否嚴格に言はゞ過去の英語よりして由來變遷し來れる跡をたづねずして現代英語の眞理に通ぜんとするは抑無理である。但し本書の目的はしかく六ヶ敷きものではない故説明上眞に已を得ざる場合、而してそれあれば事實の了解に有力なる印象助力を與ふると云ふ場合の外は可成中古以上に溯る事はしない。又一口に近代英語と言つても上下四百歳に垂んとする間のものであるから非常特別なる變動こそなけれ其間の變遷も決して小なりとはしない。例へば shall, will の用法の如きは極めて近代の發達であつて沙翁やミルトンの如きは今日の用法を知らなかつたのである。されば等しく近代英語を以て稱せらるゝと雖沙翁の文法を以て今日に施す

べからず、ミルトンの語法を以て今日の語法を律せんとするも當らざる場合が多い。然し沙翁やミルトンは普通一般に讀まるゝ所であり且その研究は極めて有益なるものであるから説及ぼす事も随分ある。それから世間普通の文法が動もすれば文法のための文法となりて斯々の場合は然々の方法に依るべし他は誤謬なりと斷じ去り言語の實情に對して極めて冷淡なるが如きは吾人の採らざる所、一方文法の理論を以て斯くあるを可とすと斷ずると同時に、又一方に於ては言語は人の心的状態の反影である事を忘れず其變調子の事實に關しては出來得る限り主觀的の態度を採りて此を考査し、吾人の依るべき規則を求むると同時に將來の變遷に對しては同情の地位に立ちたいものと思ふ。

本 論

第一章 語の集合

21. 前章既に述べし如く語の集團が主語及び述語の關係を有し完全に纏りたる意義を表はすならばそれは一箇の文である。然るに茲に又語の集團にして未だ主語及び述語の關係を具備せざれ共一種の纏まりたる意義を有し文中に於て一團として一定の役目を勤むるものがある。斯の如きものを名付けて句 (Phrase) と云ふ。而して句は文中に於て勤むる役目の種類により下の如く數種に分つ事が出来る。即ち

(1) 名詞句 (Noun Phrase)—名詞の役目をなすもの、
例へば

To err is human; to forgive divine.—Pope.*

The mountain is sacred, and to seek to learn its secrets is to die.—H. R. Haggard.

(2) 形容句 (Adjective Phrase)—形容詞の役目をなす

* to err; to forgive; to die 等は動詞の不定法である。けれ共實を言ふと不定法も to のついたのは立派な句である事は承知して居なくてはならぬ。歴史上から云ふと今日 to の付いて居る不定法は全く to school; to church 等と同じ成立のもので to は前置詞で其の次のものは與格 (Dative Case 即ち Indirect Object Case) である。だから to err; to forgive; to die の如きを只不定法とだけすましてしまふのは便宜法たるに止まる。それから to seek to learn its secrets は其内部に於て二重に目的の關係を有して居て複雑なるものであるが此場合それ等のものが纏まりて此文の主語たる役目をつとめて居るから一括して名詞句とするのである。

もの、例へば

A man *of virtue* is respected.

I met a traveller *from an antique land*.—*Shelley*.

- (3) 副詞句 (Adverb Phrase)—副詞の役目をなすもの、
例へば

I was born *in this city*.

Turn, turn my wheel! Turn round and round,
Without a pause, without a sound.—*Longfellow*.

句の内最も普通なるものは以上の三種であるけれ共、
又次の數種を認めて置かないと英語解釋の上に不便なる
事が多い。

- (4) 動詞句 (Verb Phrase)—動詞の役目をなすもの、
例へば

He *took no notice of* my presence.

- (5) 前置句 (Preposition Phrase)—前置詞の役目をな
すもの、例へば

I went *on board* a ship.

- (6) 接續句 (Conjunction Phrase)—接續詞の役目をな
すもの、例へば

In case we fail, we must try again.

- (7) 間投句 (Interjection Phrase)—間投詞の役目をな
すもの、例へば

For shame! Great Scott!

Gracious goodness, child, whatever will you do when you want a doctor?—Geo. R. Sims.

22. 又語の集團にはそれ自身の内部に主語及び述語の關係を有し、且同時に名詞、形容詞、又は副詞の用をなして文の一部を成すものがある。かゝる集團を文句 (Clause) と名付ける。例へば

(1) 名詞文句* (Noun Clause)—名詞の用をなすもの

Natural selection decides who shall live.

The fact that he has a picture-book under his arm shows that there is another child to be thought of.
—Doyle.

(2) 形容文句* (Adjective Clause)—形容詞の用をなすもの

This is the house that Jack built.

It was the name of the sailor who had given him the wondrous horn five years ago.—Kingsley.

(3) 副詞文句* (Adverb Clause)—副詞の用をなすもの

I saw him when I was in London.

Iceland will be Iceland no longer if you turn it into a little America.—Hall Caine.

*此等の文句の事は第十五章より第廿章までに於て詳説する。

23. 前節に於て見るが如き文句は夫々纏まりて何か一箇の品詞の用をなし以て文構成の一部たるか、又は既に文の構成を完うせる語の集團に従屬して以て更らに長大なる文を構成するものである。斯の如き文句を總稱して**従屬文句** (Dependent or Subordinate Clause 略して**従文**ともいふ) と稱し、従文を伴ふ文句を**主要文句** (Principal Clause 略して**主文**とも云ふ) と名付ける。

24. 而して上述の如き従文を一箇以上含む文は主語及び述語の關係が重複するを以て之れを**重複文** (Complex Sentence) と稱し、之れに對して主語及び述語の關係の單一なる文を**單一文** (Simple Sentence) と云ふ。尙茲に注意すべきは單一文必ずしも短文にあらざる事で主語及び述語の關係は單一なるも説明的の語句を多く伴ひて頗る長き文を見る事は決して珍らしくない。例へば

On the other side *he looked* down into a deep mountain glen, wild, lonely, and shagged, the bottom filled with fragments from the impending cliffs, and scarcely lighted by the reflected rays of the setting sun.—*Irving*.

此文は可なり長いが主語は *he*, 述語は *looked* で他は附屬の語句に過ぎない。

25. 文には上記二種の外、その組合せによりて次の

如き形式を以て現はるゝものがある。

- (1) 二箇以上の獨立したる單一文の組合せ
- (2) 一箇以上の單一文と一箇の重複文との組合せ
- (3) 一箇の單一文と一箇以上の重複文との組合せ
- (4) 二箇以上の單一文と二箇以上の重複文との組合せ

此内 (1) に屬するものは二箇以上の全く獨立したる單一文を何等かの便宜のために或種の關係語 (主として 對等接續詞) を以て連結したるに止まる文で此種の文をば **合成文** (Compound Sentence) と名付ける。此場合その部分たるものは單一文ではあるが長き文の一部を成すを以て矢張文句と稱し、而も各其獨立の體面を失はざるを以て之を**獨立文句** (Independent Clause) と呼び、又は各對等の値を有するを以て**對等文句** (Co-ordinate Clause) とも稱へる。例へば

God made the country, and man made the town.

My memory is still accurate, but I cannot write the words of our conversation.—Dickens.

Cast thy bread upon the waters, for thou shalt find it after many days.—Ecclesiastes, xi. 1.

而して上記 (2) (3) (4) は強て區別を立つるに及ばず、一括して之れを**混成文** (Mixed Sentence 又は Compound-

Complex Sentence) と名付ける。例を挙げると(關係語をイタリック體にする)

Then all people looked, *and* saw *that what* the deep-sighted poet said was true.—*Hawthorne*.

I do not know *what* I answered between surprise and gratitude, *but* it was understood *that* I accepted their proposal, *and* I was told *that* I was free from that hour to leave their service.—*Lamb*.

第二章 文の成立の根本形式

26. 前章説く所の如く英語の文には種々異なりたる組合せありて一様ならずと雖も、其成立の根本は主語及び述語の關係であつて、其の最單純なるは單一文である。而して合正文は單一文の連鎖に過ぎず、又重複文の主要文句は其形式に於て單一文と異ならざるを原則とする。只從屬文句に於ては多少の變化なきにあらねど今日の英語に於ては其の根柢に於て單一文と同様である。故に文の成立の根本形式を知らんとするには、先づ範圍を單一文に限りて之れを考査研究し然る後順次他に及ぶを以て便宜とする。故に本章に於ては單一文のみにつきて其の成立の根本形式を研究する事とする。

27. 主語は文の主題たるものを指定する語たるを原

則とする。凡そ主題を指定するにはそのものゝ名を以てするが最も自然であるから主語の本體は名詞である。されど名詞を用ふるに及ばざる時は此を代名詞とする。尙英語に於ては他にも名詞の代用をするものが多くありて何れも時に主語たる事を得る (§39, 1—8 参照)。英語に於ては或少数の場合*の外主語は必ず言表はさるべきもので且其格は主格 (Nominative Case) である。

28. 述語は既に説ける如く文法上は動詞を以て本體とする。而して文を構成する完全なる述語動詞は主語と人稱、數 (person and number) に於て一致する[†]所謂定形動詞 (Finite Verb) でなくてはならぬ。尙今日の英語に於ては文は必ずこの動詞を含まなければならない (時には言表はされぬ事*はあれど) が其用ひらるゝ動詞の種類如何によりて其動詞以外に尙何か他の語を伴はざれば文の述語として陳述を完うし得ざるものがある。今動詞全般につき此點を着眼點として之を考査すれば英語の動詞は次の二大別五小類に分かれる。

- A 陳述完全自動詞 (Intrans. V. of Complete Predication)
1. 自動詞 (Intrans. V.) } 例へば to sleep, to laugh, to go, to come.

* 主語及び述語の言表はされざる文例: *Hence! home! you idle creatures.*—*Shakespeare.*

† 第九章 §104—§127 に詳説する。

- B. 陳述不完全自動詞 (Intr. V. of Incomplete Predication)
 例へば to be, to become.
- C. 完全他動詞 (Complete Transitive Verb)
 例へば to catch, to strike, to have.
- II. 他動詞 (Trans. V.)
- D. 與格動詞 (Dative Verb)
 例へば to give, to send, to show.
- E. 作爲動詞 (Factitive Verb)
 例へば to make, to call, to think.

動詞に此の五種の區別あるは即ち文の陳述の形式に五種の異なりたる種別を生ずる所以であつて、又實に文の根本形式に五種の異なりたる差別を生ずる所以である。本書に於ては便宜上此の各種の動詞を中心として陳述を完成する文を順次第一公式の文、第二公式の文、第三公式の文、第四公式の文、第五公式の文と名付ける。

29. 第一公式の文。動詞は陳述完全自動詞なるを以て陳述を完成するに動詞の外には何物をも必要とせぬ。故に此式の文は文中最も單純なる構造を有するものである、今之れを表示すれば次の如くなる。表中 () 内にあるは夫々主語若しくは述語に對する修飾語句である。

主 語	述 語
Stars	twinkle.
(His) father	died (yesterday).
He	laughs (merrily).
(My) time	has come (at last).
(The) shades (of night)	were falling (fast).

30. 第二公式の文. 動詞は陳述不完全自働詞なるを以て何物か之れを補ひて以て其の陳述を完全ならしむる必要がある。而して此の種類の動詞の陳述を完全ならしむるものは名詞若しくは形容詞又はその相當のもの (§§ 39, 40) である。此の補足のために用ひらるゝ語を補語 (Complement) と稱し、且何れも其意味に於て主語と密接なる關係あるを以て特に主格補語 (Subjective Complement) と云ひ、又は時に述語名詞 (Predicate Noun) 述語形容詞 (Predicate Adjective) の名を以て呼ぶ事がある。

主 語	陳 述 部	
	述 語	主 格 補 語
James	is	kind.
John	became	(a) soldier.
Many	lay	dead.
George V.	is	(the) king (of England).
Seeing	is	believing.

尙ほ It is wrong to tell a lie. の如き文の it は只單に形式上主語の地位に就けるに過ぎず眞の主語は to tell a lie なるを以て此の如き文も矢張此の式に屬するものである。尙此種の補語の性質意義につきては §51 に、又此の種の補語を要する動詞につきては §52 に説明する。

31. 第三公式の文. 完全他動詞を述語とする文である。元來他動詞は甲より發始する動作又は甲に存する動作が乙に及ぶ性質を帶ぶるものにして、其動作の發始する、若しくは存在する主體が文の主語として有りても其動作の及ぶ目的物なくしては其文の陳述は完全でない。故に此の公式の文に於てはその動詞の表はす動作を受くるものを指定する名詞又は名詞相當のものが伴ふを法とする。此を文法上其の動詞の目的 (Object) と稱し、名

詞、代名詞は此れを目的格 (Accusative Case) に置く。

主 語	陳 述 部	
	述 語	目 的
Cats	catch	mice.
He	has	(a) brother.
Builders	build	houses.
(Many) hands	make	(light) work.
(My) brother	is studying	history.

尙此の目的の性質意義につきては §43 に説明する。

又自動詞にして時に同族目的 (Cognate Object) と稱するものを採りて此の式の文を構成する事がある。

例へば

主 語	陳 述 部	
	述 語	同 族 目 的
He	lived	(a) (happy) life.
He	dreamed	(a) dream.
They	ran	(a) race.

尙此の同族目的の種類及び其眞性質につきては §44 に

説明する。

次に他動詞を述語とする文は多くは受身の形式を採る事が出来る。上例の如き**仕懸の態** (Active Voice) の他動詞を述語とする文を**受身の態** (Passive Voice) の他動詞を述語とする文に變ずれば前の目的が後の主語となり前の主語は多くは前置詞 by の次に目的格となつて合して一箇の副詞句となるを通例とする (此事は同族目的を有する自動詞を述語とする場合にも通用する)。即ち全體の文の構造は第一公式の文と同様となる。けれ共此受身の文は前のものと區別するため特に之れを第三公式の裏と名付ける。

主 語	述 語
Mice	are caught (by cats).
Houses	are built (by builders).
(A) race	was run (by them).

尙ほ受身の文は第十四章 (§§ 144—154) に詳説する。

32. 第四公式の文. 與格動詞 (Dative Verb) 即ち「何々を」に相當する目的を要する上に、更らに「誰々に」に相當する目的を必要とする動詞を述語とする文である。「誰々に」に相當する目的は此場合間接目的 (Indirect

Object) と稱し、其れに對し「何々を」に相當する目的を直接目的 (Direct Object) と名付ける。而して此公式の文は次表の如き形式を有する。

主 語	陳 述 部		
	述 語	間 接 目 的	直 接 目 的
He	gave	me	(a) dog.
(My) brother	sent	me	this.
(The) man	showed	(the) policeman	(his) passport.
I	forgive	you	(your) sin.
(The) (old) man	told	us	(an) (amusing) story.

而して此の如く間接目的たる名詞、代名詞の格は與格 (Dative Case) である。尙ほ間接目的の眞性質及び與格動詞につきては §45 に説く。

若し又直接目的を間接目的より前に言表はさんとすれば間接目的は to 又は for を先立つる (to ask, to inquire 等の動詞の場合には of、此には別に理由があるけれ共茲には言はぬ) 副詞句となり、全文の形式は第三公式のものとなる。例へば

主 語	陳 述 部		
	述 語	目 的	述語の修飾
He	gave	(a) dog	to me.
(My) brother	sent	this	to me.
(My) father	has bought	(a) house	for me.
(The) man	asked	(a) question	of me.

又此の式の文の動詞を受身に變ずれば屢々二様の形式をゆるす。一は元の直接目的を主語に直したるものにして之れを第四公式の裏甲とし、一は元の間接目的を主語に直したるものにして之れを第四公式の裏乙とする。而して甲に於ては間接目的は與格のまゝ保留せらるゝを通常とし、乙に於ては直接目的はそのまゝ保留せられる。かく保留せられたる目的を被保留目的 (Retained Object) と稱へる。今此裏式を表示すれば

	主 語	陳 述 部		
		述 語	被保留目的	述語の修飾
甲	(A) dog	was given	me	by him.
	(An) (amusing) story	was told	us	by the old man.
乙	I	was given	(a) dog	by him.
	We	were told	(a) story	by the old man.

被保留目的の事につきては §48 を見るべく、又此の受身の文に關しては特に注意すべき事あるを以て §§152-3 に詳説する。

33. 第五公式の文. 作爲動詞 (Factitive Verb) 換言すれば陳述不完全他動詞 (Transitive Verb of Incomplete Predication) を述語とするものにして動詞は目的の外に尙補語を添へざれば完全なる陳述をなす事が出来ない。而して補語は第二公式の文の場合に於けると同様名詞又は形容詞を以て原則とし等しく述語名詞、述語形容詞と名付けらるゝが又此の補語は目的と意義上密接の關係あるを以て先の主格補語に對して**目的補語** (Objective Complement) と稱せられる。而して其の名詞の格は目的格である。

主 語	陳 述 部		
	述 語	目 的	目的補語
Father	made	me	(a)merchant.
People	call	him	Uncle Sam.
They	elected	Mr. Wilson	president.
(The) court	declared	him	guilty.
(That) misfortune	drove	(my) father	mad.

尙ほ目的補語及び作爲動詞につきては §§ 54-5 参照。

又此の式の文を受身の文に更むれば、元の主語は by の次に目的格となりて副詞句を構成し、全體の文は第二公式の文と同じくなる。但し區別のため特に之れを第五公式の裏と稱へる。而して第五公式に限らず凡て裏の文に於ては其の動詞の表はす動作をなすものが一般の人々なるか別段とり立て、言ひ表はす必要なき場合に於ては略するが普通である。下表に於て動詞の修飾の欄内に () を以て示せるはそのわけである。

主 語	陳 述 部		
	述 語	主 格 補 語	述 語 の 修 飾
I	was made	(a) merchant	by father.
He	was called	Uncle Sam	(by people).
Mr. Wilson	was elected	president	(by them).
He	was declared	guilty	by the court.
(My) father	was driven	mad	by that misfortune.

第三章 文の要素

34. 前章に於ては文の成立の根本形式を説きしが、其結果知り得たる所を基礎とし、更らに視界を擴大して各種の單一文につき文を構成する要素を考査し、之を文構成上の役目の輕重と相互關係の疎密とに依りて分類すれば次表の如き結果に歸着する。

主要素		従要素			遊離要素*	
主語	陳述部	修飾語句			關係語	開投詞又は其用をなすもの
	(第一公式)述語	陳述の附屬	部屬	文の附屬		
	(第二公式)述語と主格補語	陳述の附屬	目的の附屬	修飾語句の修飾語句		
	(第三公式)述語と目的					特殊の挿入語句
	(第四公式)述語と直接及間接目的					呼びかけの語
	(第五公式)述語と目的及目的補語					

35. 主要素 (Essential or Principal Elements). これは文の形式を具備する上に必要缺くべからざる部分にして主語たる名詞又はその代用及び陳述部中其骨子たるものを含む。これは前章に於て充分説き盡したるもの故茲には再びせぬ。

36. 従要素 (Dependent or Subordinate Elements). これは文の形式を完うするに必要なりと云ふにはあらず、只その主要素に従屬し、吾人の言はんと欲する所を

* 遊離なる語は之れを化學用語中より借用した。本書に於ては“Absolute”に相當する。

充分に言表さしむるに必要なる艱装である。凡ての修飾語句 (§ 7 参照) 及び関係語句 (§§ 8-II 参照) 之れに屬し修飾語句は更らに上表に見る如く小別せられる。今順次其例を示す

A. 修飾語句

(1) 主語の附屬 (Subject-Adjuncts)

All the boys of-this-school are diligent.

A virtuous man is respected by others.

(2) 陳述部の附屬 (Adjuncts of the Predicating Part)

(a) 述語の附屬 (Predicate-Adjuncts)

He studies *diligently*.

He did it *with-much-skill*.

(b) 目的の附屬 (Object-Adjuncts)

I want *a young* clerk.

He showed *the old* man *many curios of-promiscuous-descriptions*.

(c) 補語の附屬 (Complement-Adjuncts)

That is *a mistaken* idea.

He thought his son *very* honest.

(3) 文の附屬 (Sentence-Adjuncts) — 文全體にかゝる副詞及び之れに類する句之れに屬す。例へば

Happily he did not die.

Evidently he is not a fool.

To-be-frank-with-you, I do not approve of your plan.

In-short, this is not a true account of the matter.

(4) 修飾語句の修飾語句 (Modifiers of Modifiers)---上

述各種の修飾語句に附屬して之を修飾するもの、

例へば

Almost all the boys of this school are diligent.

All-but all men have to look back.....*Gissing*.

He studies *very* diligently.

I want a *very* young clerk.

That is an *entirely* mistaken idea.

Most evidently he is not a fool.

B. 關係語句

(1) 接續詞

You *or* I must go.

He *and* I are good friends.

Neither he *nor* I am pleased with this man.

It is *not-only* beautiful, *but* grand.

此等の文は多くは其昔合成文たりしものより漸次變遷して來た構造である。例へば第一の文は You must go, or I must go. の短縮して出來たものに外ならない。然し You or I を纏めて一箇の合成主語 (Compound

Subject) と解釋する方が便宜であるから茲に入れる。他の例に於ても之れに準ずる。加之第二の例の如きは此の法に依るにあらざれば解説が出来ないのである。

(2) 前置詞——これは多くの場合に於てはその次に來る名詞又は名詞相當語(即ち前置詞の目的)と合し、或は更らに其前に立つ語と合して句を成す。され共更らに徹に入りて其句を分解せば前置詞は § 8 に説ける如く關係語である。

He came the day *before* yesterday.

I heard *from* him.

I have found a small bird *in* the tree.

尙ほ文が重複文たる場合には他に幾多の關係語がある (§§ 10, 11) が其れは第十五章より第廿章までにゆづる。

37. 遊離要素 (Absolute Elements). 通常多くの文は上記の二要素より成る。けれ共文の中には兩者何れにも屬せず全く遊離したる分子を含むものがある。斯の如きものを文の遊離要素と稱へる。此の部に屬するものは次の三種である。

(1) 間投詞又はその用をなすもの

Alas! the bank has failed.

By Jove! I never dreamt of that.—Doyle.

(2) 呼びかけの語

Rejoice, my *countrymen*! The victory is ours.

Friends, Romans, and countrymen, lend me your ears.—Shakespeare.

Oh, *thou!* in Hellas deem'd of heavenly birth.—*Byron.*

(3) 特殊の挿入語句

A few men,—*say* twelve,—may be expected shortly.

第 四 章 相 當 語 句

38. 文の主要素たる主語、目的は名詞を以てその本體とし、補語は名詞又は形容詞を正式とし、又從屬要素たる修飾語は形容詞、副詞を以て其の本體とすれ共、又他の種類の語又は語の集團が此等の語相當の役目を勤むる場合が非常に多くある。かくの如きものを總稱して**相當語句** (Equivalents) といひ、名詞の役目を勤むるものを**名詞相當語句** (Noun-Equivalents) と稱し、形容詞の用をなすものを**形容詞相當語句** (Adjective-Equivalents) と名付け、副詞の用をなすものを**副詞相當語句** (Adverb-Equivalents) と呼ぶ。而して其の各には次の如き多數の種類がある。

39. **名詞相當語句**——これには凡そ次の八種類がある。

(I) 代名詞

He has been ill for many years.

Lo, *it* is *I*, be not afraid!—*Lowell*.

(2) 動詞の不定法 (Infinitive) 及び Gerund

*To err** is human; *to forgive* divine.—*Pope*.

Seeing is *believing*.

Talking is not always *to converse*.—*Cowper*.

此の不定法及び Gerund は一方名詞の用をなすと同時に又動詞の用をもなし、其の各自の意義性質によりては目的、補語等を探る事もあり、又副詞を修飾語として探る事がある。例へば

To tell a *lie* is wrong.

To believe *it possible* was impossible.

I like reading[†] *history*.

Reading[†] *carefully* unravels many a wonder.

To pronounce every *word carefully* is a good exercise.

(3) 形容詞——多くは the を冠し、凡そ三様の異なりたる意義に用ひられる。

(a) 複數普通名詞又は衆多名詞 (Noun of Multitude)

の用をなす。例へば

* § 21 (1) 及びその脚註参照。† The *reading* of.; Careful *reading* 等は名詞。斯の如き -ing は古英語に於ける動作を表はす名詞の語尾 -ung の直系である。The *hearing* of this is enough to ravish one's heart.—*Bunyan*.

The rich are not always happier than *the poor*.
 And thousands had sunk on the ground o'erpower'd,
The weary to sleep, and the wounded* to die.

—Campbell.

(b) 抽象名詞の用をなす。例へば

He would oft leave *the right* to pursue *the expedient*.—Goldsmith.

He could not work; *the quiet* of the room oppressed him.—Sir Walter Besant.

(c) 或物の部分を表はす。例へば

The middle of the river. *The small* of the back.
The white of the eye. *The thick* of the forest.
 Good was lying on *the flat* of his back.

—H. R. Haggard.

At *the dead* of the night a sweet vision I saw.

—Campbell.

Where were ye, Nymphs, when the remorseless *deep*
 Closed o'er the head of your loved Lycidas?

For neither were ye playing on *the steep*...Milton.

此内 deep は事によれば the のなきものかも知れない。何となれば前の the は remorseless と云ふ形容詞をつける故出来たるものかも知れない。實際古くは

* (4) 参照。尤も稀には次の如き例もある。

The rich had been assured of *his* wealth and comfort.—H. G. Wells.

the なく用ひたのである。例へば

Deep calleth unto deep at the noise of thy water-spouts.—Psalm, xlii. 7.

尙此 the なき形は次の如き對照をなす場合には今日普通語に於ても多い。

Fair is foul, and foul is fair.—Shakespeare.

O'er rough and smooth she trips along.—Wordsworth.

He went from bad to worse.

Flatter high and low, rich and poor, and silly and wise.—F. K. Ferome.

此外日常用ふる慣用句に此例が多いが the を用ふると用ひざるとは一に慣例に依らなくてはならぬ。例へば

on the whole, in the main, etc.

at last, in earnest, in vain, etc.

- (4) 動詞の現在分詞及び過去分詞——分詞は元來一種の形容詞である故、時に名詞の用をなす事を得るは前項に依りて明らかである。但し此場合には the deceased の如く單數普通名詞として用ふる場合があるが多くは前項 (a) に當る。二十世紀譯新約聖書に

Who will one day judge the living and the dead.

—II. Timothy, iv. 1.

とあるのか適例である。序に此文は James の欽定聖書には 'the quick and the dead' とあるが此の quick は正に living を意味する形容詞で前項 (a) の適例である。尙

This will be plain to *the initiated*.

The killed and the wounded lay on the field,

By the wolf-scaring faggot that guarded *the slain*.

—*Campbell*.

(5) 副詞

Where do you come from?

How far is it from *here* to *there*?

He has had *ups* and *downs*.

Thou lovest *here* a better *where* to find.—*Shakespeare*.

Every *why* hath a *wherefore*.—*ibid*.

又副詞句が名詞の用をなす事は非常に多い。例へば
from *under the stone*; from *beyond the river*.

If it [=your literary work] come from *on high*, with what decency do you fret and fume because it is not paid for in heavy cash?—*Gissing*.

I lived in the *long ago*, when the world was young.

—*Jack London*.

(6) (for +) 目的格の名詞又は代名詞 + Dative Infinitive*

* to の附いた Infinitive で Qualifying Infinitive, Gerundive Infinitive 等言ふものは又 Dative Infinitive とも云ふ (§ 21 脚註参照)。

For man to tell how human life began
Is hard.—*Milton*.

For us to delay would be fatal to your enterprise.
—*Kittredge and Farley*.

For you to know could not have helped us, and
might possibly have led to my discovery.—*Doyle*.

此形の由來につきては後章詳説する (§§ 243-5)。又
He ordered *the room to be swept* の如きも名詞相當の
ものとして取扱ふ事が出来るが茲にはしばらく言はず
後章説く事とする (§ 239)。

(7) 引用語、句、文句、又は文

‘*Impossible*’ was not in Napoleon’s dictionary.

‘*By God*’ was all he could say.

I do not like your ‘*If I could*.’

He cried, “*I am undone*.”

此場合引用符號は必ずしも要せない。例へば

What does *marry* mean?—*Shakespeare*.

Was is not *is*.—*ibid*.

But *troubled* was no word for it.—*Stevenson*.

尙次の如きも此類に屬する。

But me no *buts*.—*Fielding*.

Clerk me no *clerks*.—*Scott*.

Thank me no thankings, nor proud me no *prouds*.

—*Shakespeare*.

又次の如きも同様に見做して差支へない。

Well begun is half done.

Slow and steady wins the race.

- (8) 文句 (重複文に於て、第十五章及第十六章に詳説する)

That he is a rogue is generally admitted.

I asked him if he were angry.

前項直接引用の文即ち“ ”を附したる文は此項の名詞文句とは區別せなければならぬ。即ち此項に於けるものは純粹の從屬文句であるが“ ”の内のものは從屬文句ではない。

40. 形容詞相當語句——これには凡そ次の拾種類がある。

(1) 名詞

Stone walls do not a prison make,

Nor iron bars a cage.—Lovelace.

My salad days,

When I was green in judgment.—Shakespeare.

此の名詞を以て他の名詞を形容するは極めて原始的自然の發達に屬し、其の修飾語たる名詞を主要分子とする句又は文句を以て表はさるべき様なる比較的複雑なる意味、例へば上例につきて云はゞ *walls built of stone*; *bars made of iron*; *days when I was as fresh as*

salad と云ふが如きを其の一々言ふ繁を避け短刀直入的に其の主要分子たる名詞を其の儘他の名詞につけたものである。而して此方法は極めて簡便なるを以て他の方法が發達したる後と雖も衰へず、近代に至りては益々其勢を加へ多數の合成名詞 (Compound Nouns) を生じた (古英語に於ても今日の獨逸語に於ける如く此法が非常に盛んであつたが)。而して其意味に於ては一々約束的のものがあつて理論の範圍を脱して居るから一々記憶するより外ない。例へば *chain-bridge* は鎖を以て吊りたる橋、*chain-gang* は鎖を以てつなぎ従役中逃亡するを防がれたる囚徒隊、*chain-stitch* は鎖状をなしたる飾縫、又 *sword-cut* は刀痕、*sword-hand* は刀を執る手即ち右手、*sword-dance* は劍舞、*sword-fish* は刀の如き形をなした魚、*sword-knot* は刀の下緒を意味するが如く眞に千差萬別と云うてもよろしい。而して口語に於ては完全に合成名詞となれるものは大方初めの語に強勢 (stress) を有し、未だ充分に融合するに至らざるものは各語別々に強勢を有するを普通とする。例へば *fire'place*; *grav'el-pit*; *rock'salt'*; *grav'el-walk'* の類である。而して吾人が此項に於て注意すべきは特に此第二種に屬するものであるが現今英語の趨勢は單強勢より漸次兩強勢の方に向ひつゝありて此の方面よ

りして兩者の別を論ずる事は必ずしも最適當ではない。今第二種に屬すと認めらるゝものにつき少しく例示すれば

(a) 原料を表はすもの

*horn handle, straw hat, silver chain,
gold ring, rubber shoes, ginger ale, etc.*

(b) 「……に似たる」「……の如き」といふ意味のもの

*bow-window, copper beech, moss rose,
sponge-cake, Silver Strand, etc.*

(c) 性、齡を表はすもの

*man servant, lady doctor, boy messenger,
buck rabbit, etc.*

(d) 諸種の所屬關係を表はすもの

*mustard seed, village blacksmith,
city life, mountain scenery, etc.*

(e) 種々の關係を表はす地名

*Oxford Road, Trafalgar Square,
Hampstead Heath, Kew Garden,
Richmond Park, etc.*

町名 Road を有するものは Ox'ford Road' の如く兩強勢を有し Street 有するものは單強勢に依る。例へば Ox'ford Street, Fen'church Street.

(2) 同格名詞 (Nouns in Apposition)

Nicholas II., *Czar* of Russia.

Alfred, *king* of England.

Death was announced yesterday of Mr. Robert Watkins, the celebrated *grammarian*.

The harp, his sole remaining *joy*.—*Scott*.

又説明語又は被説明語が名詞相當語句たる事もあ
る。例へば

I, son of George Washington.

Your plan, *digging* a canal.

My proposal, *to run a tunnel thither*.

(3) 屬格 (Genitive Case = Possessive Case) の名詞、代
名詞又は同相當語

John's hat, *My* brother, etc.

Milton's Paradise Lost, *Shakespeare's* Hamlet, etc.

President *Mckinley's* assassination.

To-day's newspaper, etc.

I am at my *wit's* end.

此形の意味につきては他日詳説したいと思ふ。

(4) 目的格 (Accusative Case) の名詞

The earth is the *shape* of an orange.

It is no *use* trying.

What *colour* shall I paint your door ?

What *trade* art thou?—*Shakespeare*.

The brutes seemed the *size* of lions.—*H. R. Haggard*.

His eyes were protruding, his skin the *colour* of putty.—*Doyle*.

此形の意義用法は他日詳説するつもりである。

(5) 前置詞に導かるゝ句

A man *of virtue*, A matter *of importance*,

A wind *from the north*, A town *by the sea*, etc.

A bird *in hand* is worth two *in the bush*.

I will give the carcasses *of-the-host of-the-Philistines* this day unto the fowls *of the air*, and to the wild beasts *of the earth*.—*I. Samuel*, xvii. 46.

The Venus *of the Medici*?—she *of the diminutive head and the gilded hair*?—*Poe*.

(6) 動詞の Dative Infinitive

Time *to come*, Water *to drink*, A house *'to let*, etc.

There was work *to be done*.—*J. K. Ferome*.

The good is *to come*, not past.—*L. Hunt*.

此の不定法につきては他日詳説する。又此ものゝ眞性質につきては § 21 (1) の脚註を参照すればその一端が分かる。

(7) 動詞の Gerund

A *walking* stick, A *sleeping* car, A *riding* coat,
A *dancing* master, A *smoking* room, etc.

(8) 動詞の分詞

(a) 現在分詞

. A *sleeping* child, A *smoking* brand, etc.

The Adventure of the *Dancing* Men.—Doyle.

The curfew tolls the knell of *parting* day.—Gray.

茲に注意すべきは形容詞相當語として“—ing”の形が前項の例の如く Gerund に屬するか、又は此項の例の如く現在分詞なるかの識別法である。凡そ次に來る名詞の示すものゝ用途目的等を表はすものは Gerund、次に來る名詞の示すものゝ動作状態等を表はすものは現在分詞であるのである。例へば

A *sleeping* car = a car used for sleeping in.

A *sleeping* child = a child that is sleeping.

尤も時には何れにも考へられ識別の出來ぬものもある。例へば

A *driving* belt.

又口語に於ては Gerund を有するものは強勢これにあり、現在分詞を含むものは兩強勢を採るを常とする (§ 40, 1 參照) がこれも決して徹底的の標準とする事

は出来ぬ。例へば次の例は兩強勢を有するが其意味と相照合せば概其間の消息が分かる。

Falling sickness, *dying* day,
sleeping draught, *parting* glass.

But the sound of the church-going bell
These valleys and rocks never heard.—*Cowper*.

(b) 過去分詞

他動詞の過去分詞は多くは受身の形容詞として用ひられる。例へば

A printed matter, *A stricken* animal, etc.

Ill-gotten wealth never descends to the third generation.

Borrowed garments never sit well.

但し次の如きは受身でない。

A well-read man = a man who has read much.

An out-spoken gentleman, *A drunken* fellow, etc.

又自動詞の過去分詞は直接名詞に附して用ひらるゝ事少なく、次の如き場合に限られて居る。

A departed guest, *A faded* flower,

A fallen city, *A retired* officer,

A risen sun, *A returned* soldier,

A withered flower.

而して他動詞の過去分詞は名詞の直く次に置きてこれを形容する事を得れ共自動詞の過去分詞は通常之を許さない。必ず關係代名詞によりて導かるゝ文句とせなければならぬ。例へば

(他動詞の場合) I got a letter *written* in French.

(自動詞の場合) I am sorry for the candidate *who failed* in the last examination.

尤も詩及び俗語に於ては此法が可なりある。例へば

A Daniel *come* to judgment!—*Shakespeare.*

Toll for the brave!

The brave that are no more!

All *sunk* beneath the wave

Fast by their native shore!—*Cowper.*

He led me to a place where I found a kind Englishman *lived* right in the midst of the natives.

—*Mrs. Gaskell.*

又往來を意味する自動詞の過去分詞は時々普通文體に於ても此の如く用ひられる。例へば

A short dialogue on the subject of the country ensued, on either side calm and concise, and soon put an end to by the entrance of Charlotte and

her sister, just *returned* from their walk.

—*Jane Austen.*

(9) 副詞

An *up* train. A *down* train. A *through* ticket,

The *then* king, The *above* statement,

The school *here*, etc.

Say first, of God *above* or man *below*.—*Pope.*

此の用法も (1) の場合と同様句又は文句を以て言ふべき比較的複雑なる意味を、委しく言ふの繁を避けてその要點たる副詞のみを短刀直入的に名詞につけたものである。例へば

An *up* train = a train going up

The *then* king = the king who reigned *then*

此の内場所に關するものは上例の如く名詞の後に置くを法とするが卑俗語に於ては前に置く事が多い。例へば

Get a top of that *there* seat, and look at the crowd.

—*Dickens.*

(10) 文句(重複文の場合、第十七章に詳説する)。

This is the house *that Jack built.*

God helps those *who help themselves.*

Not all *that tempts your wandering eyes*

And heedless hearts, is lawful prize.—*Gray.*

41. 副詞相當語句——これにも凡そ次の拾種類がある。

(1) 目的格の名詞——通常 Adverbial Objectives と稱するもので意味に於て凡そ次の四種に分かれる。

(a) 距離又は方向を表はすもの

We have walked ten *miles*.

Come this *way*, please.

They went *home*.

元來古英語に於ては名詞の屬格、與格、目的格は屢々副詞として用ひられたるもので Chronicle には *othres wegges** (=another way 屬格) と云ふのが見える。然し又前置詞を用ひて *on otherne weg* (*Matthew*, ii. 12) の形もある。丁度今日吾人が He returned another way と云ふし又 He returned by another way と云ふ如きものである。又 They went home の home は今日では一般純副詞の如く思はれて居るが歴史的には目的格の名詞 (古英語 *hām*) である。

(b) 時期又は時の連續を表はすもの

He arrived here late last *night*.

We stayed there all the *summer*.

And the Philistine drew near *morning* and *evening*, and presented himself forty *days*.

* 獨逸語 *Gehen Sie Ihres Weges* と同じ構造。尙 *Come thy ways*,—*Shakespeare, As You Like It*, II. iii. 66 等参照。今日でも地方言としては英國の北部地方に此用法がある。

—*I. Samuel*, xvii. 16.

Why, last *fall* (=autumn), I let him go to Cincinnati alone.—*Stowe*.

Nicholas Vedder! why, he is dead and gone these eighteen *years*!—*Irving*.

The sixth *day* of our being at sea we came into Yarmouth Roads.—*Defoe*.

これも元來は多く屬格* を用ひたもので、米國東部では今日も Do you sit up late *nights* (=by night)? What do you do *days* (=by day)? Where do you go *winters* (=in winter)? 等の言方に於て保存せられて居る。これ等は複數でなく屬格副詞の遺跡である事を忘れてはならぬ。英國では It is early *days*[†] to tell what will come of this と云ふ様なものがそれであるが多くは前記の如く目的格を用ふるか in the morning, by day 等の如き句を用ふる。併しよくある of an evening, of a Sunday 等は正に此古き屬格の遺芳である。例へば

Now a pawnbroker's business is mostly done of an *evening*.—*Doyle*.

Should you ever wander of a *Sunday morning*...

—*J. K. Ferome*.

* 獨逸語 *des Morgens* 等参照。又 Shakespeare の *Julius Caesar*, I. ii. 193 の *o' nights* は “double genitive” の遺例で、今日でも英國中部以北の方言中に残つて居る。

† Shakespeare, *Troilus and Cressida*, IV. v. 12 参照。

(c) 計量又は度合を表はすもの

This is a good *deal* bigger than that.

This book costs ten *dollars*, and is quite worth the *cost*.

He is fifty *years* old.

He was plunging *ankle-deep* in snow.—*G. Eliot*.

I will answer for it, he never cared three *straws* about her.—*Fane Austen*.

But the telegraph posts upon this line are sixty *yards* apart.—*Doyle*.

(d) 手段、方法、模様等を表はすもの

Bind him *hand and foot*.*

They went *side by side*.

I will tear thee *limb* from limb.—*Lord Lytton*.

I can't make trade that *way*.—*Stowe*.

To meet me, *man to man*.—*M. Arnold*.

又不定の名詞、代名詞にて此用法をなすものがある。

例へば

It was quite as strange as his appearance, and yet it *nothing* resembled the foreign English which I had been in the habit of hearing.—*George Borrow*.

* これは又古英語に於ては hand and foot が bind の目的で、him は輿格であつたのである。例へば (Anglo-Saxon Bible, *Matthew*, xxii. 13 参照)。併し今日は矢張 him を目的と考へ hand and foot は此項目に入れる。

其他 *Nothing* daunted, *None* the less true などは今日に於ても普通である。

又普通同族目的* (§ 31 参照) と云ふものも屢々此用法と相接近するものである。例へば

The child slept a sound *sleep*.

It rained *cats* and *dogs*.

It blew great *guns*.

尙此形の詳説は § 44, c にゆづる。

(2) 與格の名詞又は代名詞

Give *me* something to eat.

He brought the *man* a cup of tea.

此形即ち間接目的* の例は § 45 に澤山出す事とし茲には別に與格の名詞又は代名詞には Dative of Interest と云ふ用法と Ethical Dative と云ふ用法とがある事を記憶して置きたい。例へば

Your old umbrella stood *me* in good stead.

Knock *me* at this gate, sirrah.—*Shakespeare*.

* 文法の純原理より言へば直接目的も亦副詞相當語であるのである。此事は英語の内面研究に依りても古くは或動詞が屬格の目的を採り (to desire, to miss 等其例に乏しくない。今日でも其遺跡として to miss of a person と云ふことがある) 又或動詞が與格の目的を採り (to thank, to answer 等) たる事等によりて餘程副詞の色彩を見る事が出来る。又西班牙語に於て直接目的が人であると目的格を用ひずして與格を用ひる如きは最も此間の消息を傳へて居る。例へば

Los hijos aman á la madre. (=The sons love to the mother.)

の如きは Dative of Interest に屬し *for me* 等の意味を有する。而して Ethical Dative の方はこれと相似て只其意味を失ひたるものと見て差支へがない。例へば

It is not enough that you have burnt *me* down three houses with your dog's trick.—*Lamb*.

尙與格の代名詞は所謂反照目的 (Reflexive Object §49 参照) として自動詞の後に用ひらるゝ事があるが之れも茲に加へねばならぬ。例へば

Hie *thee* hence! Fare *thee* well!

They knelt *them* down.—*Scott*.

又次の如きはこれの近代の形である。

To oversleep *oneself*, To overeat *oneself*.

- (3) 形容詞——元來形容詞と副詞とは境界相接したるもので相互の交感はあまりに密接で時に區別なきは言語の自然的事實である*。古英語に於ては形容詞に e を附加したるものが副詞 (ly は元 lie で manly, princely に於けるが如く名詞から形容詞を造りたるもの、そしてそれに e を付けると副詞に

* 此事は自分の経験によると色々の疑の原因をなして居るから特記して置く。形容詞又はその或る變化(多くは中性の名詞にかゝる形の形容詞)がそのまゝ副詞になる事は諸國語に互る事實である。例へば(拉) *nimum felix*=*exceedingly* happy. (佛) *une fille nouveau-née*=*a new-born* girl. (伊) *Egli lo guardò fisso*=*He looked at him fixedly*. (露) *kharasho gawareet'*=*to speak well*.

なつたものである。例: *manlice manlice*) で今日の

The moon shines *bright*.

の如き *beorht*(=bright) に *e* をつけた *beorhte* (=brightly) の語尾 *e* が失はれたるもので歴史上副詞である。かう云ふ風に土着の語に於て形容詞と副詞とが形態上の別を失ひたる後、前頁の脚註に記した様な外國語の勢力も加はりて拉丁系の形容詞が副詞代用となるの例を開いた。次の如きは其例である。

After the passing these two bills, the temper and spirit of the people...grew *marvellous* calm and composed.—*Clarendon*.

Thou didst it *excellent*.—*Shakespeare*.

今日俗語に於ては此例が非常に多い。例へば

She talks *awful*.—*Mark Twain*.

The mountains proved *exceeding* high.—*Watts-Dunton*.

(4) 前置詞に導かるゝ句

They danced and played *in the wood*.

You are good *for nothing*.

It was not uncommon for him to call upon us *of an evening*.—*Doyle*.

(5) Dative Infinitive — これは前にも言つた通り

Qualifying Infinitive, Gerundive Infinitive 又は Infinitive of Purpose と名付けられるもので普通の用法に次の六種類ある。

(a) 目的を表はすもの*

We eat *to live*, not live *to eat*.

The water of this well is good *to drink*.

No attempt was made *to express* these names in writing until the eighth century of our era.

—Griffis.

(b) 結果を表はすもの

I do hope that I shall live *to see* him.—Hawthorne.

I awoke one morning *to find* Sherlock Holmes standing, fully dressed, by the side of my bed.

—Doyle.

Fresh editions of every paper had been sent up by our newsagent only *to be glanced* over and tossed down into a corner.—*ibid.*

(c) 原因を表はすもの

They seemed distressed *to find* me.—H. G. Wells.

* §21 の脚註に於て Dative Infinitive は元來 to school 等と同様のものだと言つて置いたが、其事は最もよく此場合に分かる。to live, to drink, to express 等の to は矢張り方向を示して居るのである。

Did He smile his work *to see*?—*W. Blake.*

(d) 判断の下題を表はすもの

Who be you, John Durbeyfield, *to order* me about and *call* me “boy”?—*Hardy.*

It must have been a lovely child

To have had such lovely hair.—*Tennyson.*

(e) 特別なる場合の指定をなすもの

The blow was easy *to strike*.—*H. S. Merriman.*

They fight for money, marry for money, live for money, are ready *to die* for money.—*J. K. Jerome.*

(f) 文の附屬たるもの (§ 36, A. 3.)

To begin with, the man was enormously tall.

—*H. R. Haggard.*

To be sure, I laughed over this.—*Stevenson.*

尙此の不定法の統一的研究は他日試みる事とする。

(6) 分詞句 (Participial Phrase)

Strictly speaking, this is inadmissible.

Some few of us are honest, *comparatively speaking*
—*J. K. Jerome.*

Taking up a pen, he wrote something on a piece of paper.—*Dickens.*

(7) 遊離文句 (Absolute Clause)

The sun having risen, we recommenced our journey.
All told, we had scarce two miles to run.—Stevenson.
Our fatigues forgotten, we returned to our tent.
—*H. R. Haggard.*

尙此形を吾人が文句と名付くる理由、其意義、種類、前項に言ふ分詞句との關係、差異等の詳論は之れを第廿一章に譲る。

(8) 文句（重複文の場合、詳説は第十八章より第廿章までにする）

I will tell him when he comes.
Where there's a will, there's a way.
We frolic while 'tis May.—Gray.

第五章 動詞の目的

42. 英文法に於て目的と稱するものに三種の區別がある。一は仕懸けの態の他動詞（場合によりては自動詞も）に附するもの、二は前置詞に添ふもの、三は *near*, *like* 等少數の形容詞に付くものである。何れの場合に於ても其動詞、前置詞、形容詞が其目的たる名詞又は名詞相當の語句を支配す (*govern*) と云ふ。支配の事は第十三章に説くが茲には動詞の目的のみに就きて其意義と種類とを説く。

43. 直接目的 (Direct Object). 第三公式の文に於て見たるもの、及び此と同様のものが是である。其格は目的格 (Accusative Case) でその普通の位置はその動詞の後である。而して此種類の目的は其意義によりて次の二種に分かれる。

(1) 動作を受くるものを表はすもの

The people love their *king*.

Father bought a *house*.

John killed a *snake*.

The girls were plucking *flowers*.

Fortune favours *the brave*.

What ailed *you*?—*Miss Mulock*.

(2) 動作の結果として生ずるものを表はすもの

He wrote a *letter*.

The builders built a *house*.

The people elected their *president*.

此の外他動詞にして同族目的を探るものがあるが次節の同族目的と區別してこゝに入れる。此場合に其の目的は爲さるゝ動作其のものを表はすか又は副詞的説明である。例へば

The blacksmith struck a mighty *stroke*.

Neither fear ye their *fear*.—*Isiah*, viii. 12.

尙次の如きも此類である。

The stag at eve had drunk his *fill*.—*Scott*.

Satan……toward the gates of hell

Explores his solitary *flight*.—*Milton*.

44. 同族目的 (Cognate Object). 自動詞は其性質上目的を採らないのを當然とする。然も英語に於ては屢々自動詞の次に目的格の名詞來りて目的と稱せらるゝ場合がある。而して其名詞はその動詞と同一根の語なるか若しくは同様類似の意義を有するものなるを普通とする故此の名を以て稱せらるゝ (Cognate < 拉丁語 cognatus = 同じ生れ) 例である。又此目的を有する自動詞の文は受身にする事の出来る場合も少なくはない (§§ 31, 145 参照)。今其の形式より見ればこれには次の三種類がある。

(I) 全く動詞と同一根の語なるもの

He laughed a scornful *laugh*.

The king lived a *life* of an exile.

She smiled a sweet *smile*.

I have fought a good *fight*.—*II. Timothy*, iv. 7.

Whoso curseth father or mother, let him die the *death*.—*Mark*, vii. 10.

As I slept, I dreamed a *dream*.—*Bunyan*.

The bat hath flown his cloistered *flight*.—*Shakespeare*.

He sighed a *sigh*, and prayed a *prayer*.—*Scott*.

Amyas slept that night a tired and yet a troubled
sleep.—*Kingsley*.

(2) 異根なれ共同意義又は類似意義を有するもの

They fought a fierce *battle*.

The bells rang a merry *peal*.

He acted his *part* well.

They ran a *race*.

Death grinned horrible a ghastly *smile*.—*Milton*.

It blew a terrible *storm* indeed.—*Defoe*.

Thither he wings his airy *flight*.—*Cowper*.

I sighed a long *adieu* to fields and woods.—*ibid.*

(3) 最上級の形容詞のみを留めて名詞を省略するもの

He breathed his last (breath).

He tried his hardest (trial).

They shouted their loudest (shouts).

Behave your best (behaviour).

I must do my *best* for the present.—*G. Eliot*.

Horner ran his *fastest*.—*H. S. Merriman*.

扱、既に § 41, 1-2 の脚註に--言せし通り目的なるものは其種類如何を問はず、動詞の表はす動作の及ぶ範圍方向等を示すもので原始的意義に於て副詞的のも

のであるが、此事は同節にも言つた如く此同族目的及び次項の間接目的の場合に於て最も顯著なるものがある。即ち上例を見れば何れも動詞に對する一種の説明を與へて居る（多くは形容詞又はその相當語の助をかゝりて）のである。而して其の所謂 Adverbial Objective との間隔は實に只一步である。例へば

(同族目的) They ran a *race*.

(Adv. Obj.) They ran a *mile*.

(同族目的) He slept a *sleep*.

(Adv. Obj.) He never slept a *wink*.

尙古英語に於ては此場合目的格を用ひた事と與格を用ひた場合とがある。例へば

Thā leofodon *heora līfe* (Acc.)=They lived their life.

He feaht *miclum feohtum* (Dat.)=He fought great fights.

又此同族目的に類して代名詞“it”が用ひらるゝ事がある。例へば

Come and trip *it* as you go

On the light fantastic toe.—*Milton*.

I wili drop it on your 'ead (=head) if you don't hook *it*!—*Doyle*.

Doyle の例は俗語で hook it は「逃げる」「立去る」

等を意味する。其他 Go it! Foot it! 等此例は澤山あるが、他日“it”を論ずる時まで譲つて置く。

45. 間接目的 (Indirect Object). 第四公式の文即ち與格動詞を述語とする文は直接目的の外に間接目的と云ふ與格の目的を探る事及び其相互の位置につきては既に § 32 に説いた。それから此間接目的が副詞相當語の一である事は § 41, 2 に於いて之を説き且同時に Dative of Interest 及び Ethical Dative の事も一言したがこれ等も矢張一種の間接目的と謂ひ得る事を承知して置かなくてはならぬ。今二重の目的を探る主なる動詞を列擧すると次の如くである。

to afford	to allot	to allow	to assign	to award
to bear	to bequeath	to bid	to bring	to buy
to cause	to convey	to cost [†]	to deny [†]	to do
to ensure	to fetch	to find	to forgive [†]	to forbid
to give	to get	to grant	to guarantee	
to hand	to last	to leave	to lend	to lose
to make	to offer	to order	to owe	to pardon [†]
to pass	to pay	to permit	to play	to prescribe
to present	to proffer	to promise	to read	to reach [†]
to refuse	to render	to restore	to save [†]	to sell
to send	to show	to sing	to spare [†]	to take
to tell	to throw	to wish	to write	to vouchsafe
to yield				

此内†印を付けたものは通常その間接目的を副詞句に書替へる事がない。今少し許り例を擧げる。

He allowed his *wife* one hundred pounds a month.

Richard bade *them* adieu.

I bear *him* a great affection.

The accident caused *her* many a tear.

The doctor forbade his *patient* wine.

They made *me* a signal.

This mistake will lose *you* many marks.

He ordered the *prisoner* whipping.

He has played *me* a nasty trick.

Reach *me* the hat, please.

No one can refuse the *lady* anything.

That saved *us* a great deal of trouble.

The king vouchsafed *them* an audience.

If thou do (take what is mine), it will cost *thee* thy life.—*Lord Berners.*

I pray thee then deny *me* not thy aid.—*Milton.*

So it does *them* good, and *us* good at the same time.

—*Dickens.*

I have no doubt that I shall find *you* a situation.

—*Doyle.*

He also offers *you* a suitable income.—*Mrs. Burnett.*

I owe *you* an apology.—*Doyle.*

He passed *me* word of that.—*Stevenson.*

Nothing would serve him but he must read *us* the poems.—*Mrs. Gaskell.*

I can wish *you* no better lot.—*Irving.*

46. 動詞 “to ask” 及び “to teach” は古英語に於ては目的格 (Accusative Case) 二箇を採つたが今日に於ては上記の場合と區別がない。例へば

I asked him his opinion.

They taught the boys English.

47. 上記の動詞の内或物は直接目的に不定法を採る事がある。例へば

I will teach you *to rummage* my book-shelves.

—*C. Brontë.*

I gave him *to understand* that I had some valuable furniture in my box.—*Swift.*

尙一般二重目的を有する文の受身につきては §§ 152-3 に説く。

48. 被保留目的 (Retained Object). 既に §32 に於て述べし如く二重の目的を有する文は受身の構造に更むる時其目的の中一が元の儘に保留せられる。これを英文法に於ては被保留目的と云ふ。此物に關しては格別注意す

べき程の事も無き故茲には只二箇の例を擧ぐるに止める。

I trust, should better health be vouchsafed *thee*, that some day soon.....*Miss Mulock.*

In my age I am forbidden horse *exercise*.—*Thackeray.*

49. 反照目的 (Reflexive Object). 英文法に於て特に反照目的と名付くるものは自動詞が與格を採る場合につきて言ふので、其の與格の代名詞は普通の人稱代名詞にても又は—self,—selves を有するものなるも等しく反照目的であるのである。例へば

Hie *thee* hence!

Fare *thee* well!

I overslept *myself* this morning.

He overate *himself*.

I bethought *myself*, however, that perhaps the skin of *him* might one way or other be of some value to us.

—*Defoe.*

I fear *me* that thou hast overreached *thyself* at last.—*H. R. Haggard.*

Vaulting ambition which overleaps *itself*.

—*Shakespeare.*

They entered the vestibule and sat *themselves* down before the wide hearth.—*H. R. Haggard.*

I followed *me* close.—*Shakespeare.*

Then lies *him* down the lubber fiend.—*Milton*.

They knelt *them* down.—*Scott*.

I sat *me* down and stared at the house of Shaws.

—*Stevenson*.

それでこれは他動詞の直接目的たる場合と嚴重に區別せなければならぬ。例へば *Satan turned himself into a serpent* とか *He killed himself* 等の場合は只代名詞が反照代名詞だと云ふ丈で茲に謂ふ反照目的ではない。而して此の反照目的を用ふる事は今日は餘程少なくなつた。又用ふるにして—*self*,—*selves* の方を多く用ふるのであるが、古くは普通の人稱代名詞のみであつた。例へば

Hie *him* hāmweard ferdon.—*Orosius*.

(=They *them* homeward marched.)

I was weori* of wandering and wente *me* to rest.

—*Piers Plowman*.

兎に角動詞は自動詞で目的は與格である。此事を忘れてはならぬ。

* =weary